

かのひとの訃を聴きし夜の雪に似て寒くかなしき山の雪かな

そのなかに誰が子の聲やまじれると耳そば立てて風を聴く

風にわれも吹かれて飛ぶごとし戀なきものはあはれなるかな

狂ほしき心となりぬ目閉づれば馬樂の姿目にうかび來る

風を聴きておもふはすでに亡き友啄木がありし日のこと

悵然とわれうなだれてあるときの胸の思を知るや知らずや

君を思ふをりから夜半の霜の聲胸にひびきて堪へがたきかな

寂しやと云ふあはれなるかこちごとこの冬の日に幾たびかする

みづからを偽らずして生きむには憤ろしき世ぞとおもひぬ

われと墮ちみづから棄ててありし日のわれにおののく寒きかへりみ

燃え盡きし火なりとわれのことを書きみづから灰と名告る君かな

幾とせを経てしみじみと思ひ知るかなしみに似し遠山の雪

遠山の雪をながめてふと思ふ馬樂の家の屋根の雪かと

酒汲めどまた悲しますしみじみとうき世の波に身をまかせ居り

誰かわが涙を拭ふものなきやかく叫びしも幾年のまへ

風の音はけうとし世を擧げてわれをあざける聲にかも似る

われ起たむ獅子のごとくにわれ起たむかく思ふこと日々にして

獅子もその窟にあらば眠るべしわれのわが家にあるがごとくに

世に人にかかはりもなく魚のごと^{あまご}喰^くうてあるわれと思ふや

月あかり雪あかりより寒うしても思ふだに堪へぬ夜半かな

月あかりかうかうとして明けれど寒葉莊の訪ふ人もなし

業
火
餘
燼

何ごとの^い禰りか知らぬ地震ひぬ天意え解かずおののきて居り

人死にぬ修羅道のごと人死にぬかなしいかなや人の死ぬこと

うち日さす都もほろぶ時來ぬと業火のまへにおののきて居り

地獄繪をよごよごと見て思へらく現身はいどあはれなるかな

業火餘燼

いまもなほ目に残れるは焼あとの芝香が墓の寒きまぼろし

人[✓]を焼く煙とともに雨は来ぬ冬まだ来ぬに寒き雨かな

怖ろしき幾夜を重ね生きながら地獄の道をたごらむとする

空遠く飛行機見えて天日^{てんじつ}はものすさまじく落ちむとするも

夜もすがら絶えず聴こゆる地の聲にふるへおののくわが心かな

吾子^{あこ}は寝ぬわれは眠らで夜を守らむこの怖ろしき更けがたき夜を

そのむかし馬樂と見たる月に似し月はあれごもすさまじき夜や

大地の唄りとすればこころよし地震^{だいち}も畏れでかく云ふや誰

生きながら黄泉よみのすがたを見ることがいかに悲しきものとかは知る

酒甕の覆へるさま目に見ゆと無頼のこころ地震にはほは笑む

そのかみの別れに君と聴きしごと地震の絶え間に鳴ける蟲かな

馬樂忌の酒に更けたるかへり路に見し淺草の月に似る月

すさまじき夜ながら空にかかれるは黄楊の櫛にも似たる月かな

大空の月いと細し夜ごとの心細さに月も瘦せけむ

ありし日の銀座思ひて涙落つ世に亡き人をしのぶこころに

華やげる人の末路を見るときあはれさ覺ゆ今日の銀座は

わが胸も焦土となりぬいかにせむ寂しかなしと云ふ人も見ぬ

馬樂の忌小せんの忌など思ひつつわれ淺草の焼あとをゆく

淺草も焦土となれば焼あとの公孫樹いも寒き秋なりしかな

源治店の路次もいまなしありし日の人のおもかげいかにもとめむ

江戸名所圖繪もほろびぬわが夢も消えて空しと歎けるや誰

うち日さす都のなかをたもとほりしみじみと知る現身の秋

夜の心畢

522
281

終